いずみさの昔と今 第298回

「中世から近世へ」

今号からは10月10日㈯より開幕する秋季特別展「天下分け目の樫井合戦～中世から近世へ～」に関連して中世から近世への移り変わりをテーマに泉佐野の歴史について触れます。

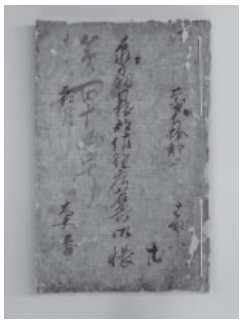
まず中世（11～16世紀末）の社会について確認してみます。この時期の在地有力者は、幕府の被官や守護など有力武士の関係者、在地の土豪などのほか、寺社勢力や貴族らに寄進された荘園の現地管理者である荘官などの中央と繋がりを有する在地の勢力が成長して現れます。泉佐野では室町幕府守護細川氏、日根荘を支配していた九条家、また根来寺・粉河寺などの寺社勢力といった有力者のほか、在地の武士や土豪の勢力が活動しました。市域の武士としては、長滝・日根野の日根野氏、鶴原の鶴原氏、佐野の多賀氏、樫井の樫井氏、上之郷の上郷氏などが確認できます。

経済面でみますと、職人の多様化、銭の流通、市場の発展などがあり、堺のような市が立つ街が成立し、寺内町や門前町なども現れました。泉佐野の場合、市場村や佐野村などで定期市が立ち、様々な人の交流、物の移動、盛んな経済活動が行われたことが「政基公旅引付」や「実隆公記」から確認できます。信仰面では、前回紹介した牛頭天王のように疫病や災害などに関する神仏信仰や民間の信仰（安産祈願など）、さらに行基、役行者、空海、安倍晴明といった実在した人物の名前に仮託した新たな中世神話が創出され、寺社や霊場の縁起、伝説が成立します。泉佐野の場合、長滝付近に行基に関する伝承や、佐野から鶴原には弘法大師空海の杓井戸や顕如上人などの伝承、七宝瀧寺では役行者に関する伝承が残っています。こうした中世期から戦国期末にかけて起こった緩やかな変動は、近世へ移り変わる助走となりました。

では、泉佐野での中世から近世への移行期をみてみると、豊臣秀吉の根来攻めが象徴的です。秀吉による和泉・紀州への大侵攻は、在地勢力の力を削ぎ、結集した泉佐野の人びとを追い散らし、根来寺を壊滅に追い込んだ中世的勢力の滅亡を示す出来事でした。

対象となった根来寺は、鎌倉時代、覚鑁上人が高野山から大伝法院を紀州岩出へ移したことに始まります。以後、在地の人びととの縁を深め、一大勢力を誇るようになります。お隣の信達荘（泉南市信達）は、日根荘に最も近い根来寺の荘園でした。日根荘内でも根来寺は地域の有力者の血縁者を寺内に迎えることで在地との縁を活用した支配を広げていきます。中庄の新川家や熊取の中家などは根来寺の中に子院を建て、そこに子弟を入院させることで根来寺との縁を深め、在地支配に役立てました。

ところが、天正13（1585）年に行われた秀吉の根来攻めによって根来寺の支配は一瞬で崩壊します。（11月号につづく）



▶慶長十二年泉州日根郡佐野庄名寄帳（当館蔵）

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日　月曜日、祝日（祝日が月曜日の場合はその翌日、日曜日の場合はその翌々日）
開館時間
午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
入館料　無料

日本遺産・中世日根荘を巡る⑮

～絵図編（14）「無辺光院」～

JAPAN HERITAGE
日本遺産

「日本遺産」に認定された「旅引付と二枚の絵図が伝えるまち ―中世日根荘の風景―」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介します。

問合先　文化財保護課

◀日根野村絵図に記された「無辺光院」

▼「無辺光院総門」

▼無辺光院関係の字名

約700年前に描かれた日根野村荒野開発絵図の日根野村の地域において、境内地、古作田、寺内荒野を含む広大な寺院（廃寺）が見られますが、この寺は前回紹介した禅興寺とともに謎に包まれた寺院となっています。

鎌倉～室町初期に九条家家司の醍醐源氏であった源盛長が氏寺・菩提所として支配し、日根荘の政所が禅興寺からここに移されたと考えられています。その末期あたり以降、無辺光院領の支配権や住持の任命権は九条家に移り、日根野東方の政所の役割を果たしたようです。

近世には信長の紀州攻めにより焼失し廃絶しましたが、「大井関神社中之坊（真言宗）」（現在の慈眼院）がその一部という見解もあります。

現在の日根野東上に「寺山」「門口」「大門の上」という字（あざ）の地名が残ることから、この付近を中心に「惣門口」という名の字が残る日根野小学校の付近まで無辺光院が広がっていたと考えられます。

※絵図の写真は、歴史館いずみさの所蔵の複製を使用（原本は宮内庁書陵部所蔵）